

泊桂木遺跡

福岡県前原市大字泊^{とまり}字桂木^{かつらぎ}所在遺跡の調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 64 集

1997

前原市教育委員会

泊桂木遺跡

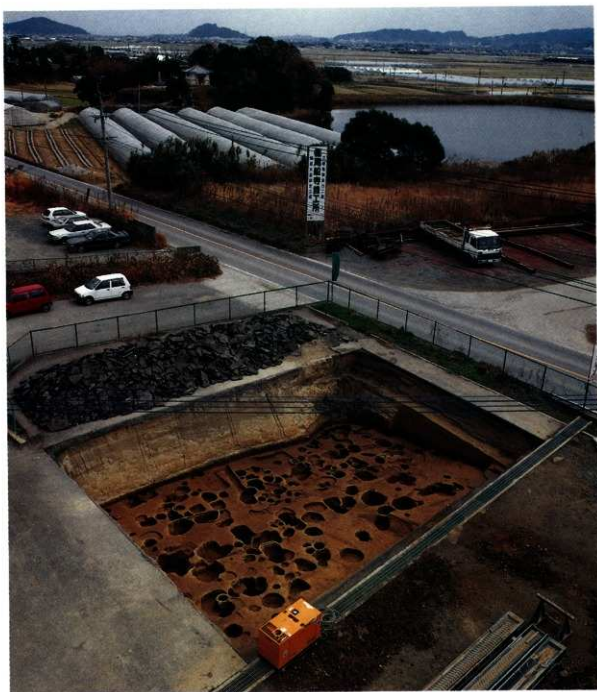
福岡県前原市大字泊^{とまり}字桂木^{かつらぎ}所在遺跡の調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 64 集

1997

前原市教育委員会



泊桂木遺跡 弥生～古墳時代遺構越しに今宿平野をのぞむ。
(ため池背後には干拓された古今津湾、さらに後方中央には国史跡今山遺跡がみえる。)

序

前原市をはじめとする糸島地方は、農村部では昔ながらの純農村風景を色濃く残しているというものの、都市部では福岡都市圏のベッドタウンとしての近年急激な人口増加、都市化が進行し、農業経営も大きな変革期を迎えつつあると言われています。

農業経営者のみなさんも都市近郊形の農業を模索しつつ、消費者の多種多様なニーズへの迅速な対応をめざし日々研鑽を積んでいらっしゃいます。栽培技術の向上、流通体系の整備等、時代の要求に応えるために新たな種々設備投資も必要となっています。

このたび福岡市農業協同組合が計画された倉庫建設計画に際し、事前に建設予定地の文化財審査を実施いたしましたところ、貴重な文化財が発見され、やむなく発掘調査を実施いたしました。調査によって得られた貴重な成果を後世に永く伝えるため、本調査報告書を刊行することいたしました。

本書が当地域の文化財保護思想の高揚、歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査にあたっては福岡市農業協同組合の各位には文化財保護の趣旨をご理解いただき、ご高配を賜りました。末尾ではありますが心から感謝申し上げます。

平成9年3月31日

前原市教育委員会
教育長 梶木昭生

例 言

1. 本書は、福岡県前原市大字泊字桂木に所在する埋蔵文化の財調査報告書である。
2. 発掘調査は前原市教育委員会が平成8年度に実施し。その結果を平成9年度に整理、検討し、報告書としてまとめた。
3. 発掘調査で検出した各遺構について、掘立柱建物をSB、溝をSD、土壌その他をSXとし、柱穴等はPitと記している。
4. 本書に使用した遺構の実測、および写真撮影は岡部裕俊、野田純子が、平板地形測量図は、主に岡部が作成し、製図は岡部、野田が行なった。
5. 遺物の実測および製図は、平尾和久、野田純子、島影弥生が行なった。
6. 本書で報告した遺物、および図面、写真等の資料は一括して前原市立伊都歴史資料館に保管している。
7. 本書の執筆、編集は岡部が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
第2章 調査の記録	3
1. 位置と環境	3
2. 調査の概要	10
3. 歴史時代の遺構、遺物	12
土壌	12
溝	16
4. 弥生時代、古墳時代の遺構、遺物	18
掘立柱建物	19
溝状遺構	23
その他の遺構	24
第3章 おわりに	32

図版目次

- 図版1 泊桂木遺跡周辺の航空写真
- 図版2 a. 南壁土層断面
b. 歴史時代の遺構面完掘状況（北西から）
- 図版3 a. 歴史時代包含層瓦器出土状況
b. SX-01断ち割り状況
- 図版4 a. 弥生～古墳時代土器包含層土器出土状況（南から）
b. 弥生時代～古墳時代遺構調査状況
- 図版5 a. SD-107 土器出土状況（北から）
b. SD-107 土器出土状況（東から）
- 図版6 a. Pit170 完掘状況
b. Pit123 下層土器出土状況
- 図版7 a. SX-103 白色粘土土層断面
b. Pit91 鉄斧出土状況
- 図版8 a. SX-101 土器発見状況（東から）
b. 同上 近景（東から）
- 図版9 a. SX-101 土器検出状況全景（上から）
b. 同上-101 土器検出状況全景（東から）
- 図版10 弥生～古墳時代遺構完掘状況
- 図版11 出土遺物①
- 図版12 出土遺物②

挿図目次

第1図	敷地内における発掘調査地点の位置	2
第2図	泊桂木遺跡の位置と周辺の主な遺跡(1/60,000)	3
第3図	泊地区の地形と小字名(1/7,500)	4
第4図	泊熊野甕棺墓の埋納状況の推定(1/20)と土器実測図(1/8)	6
第5図	泊熊野甕棺墓に類似する甕巻墓棺墓例(遺構断面図は1/30、土器実測図は1/12)	7
第6図	泊大塚古墳群における古墳の配置(1/1,500)	8
第7図	調査区南壁、東壁SD-01付近土層図(1/40)	10
第8図	歴史時代遺構配置図(1/60)	11
第9図	弥生～古墳時代の掘立柱建物等配置図(1/60)	13
第10図	SB-01、02実測図(1/60)	14
第11図	SB-03、04実測図(1/60)	15
第12図	SB-05実測図(1/60)	16
第13図	SB-06実測図(1/60)	17
第14図	SB-07実測図(1/60)	18
第15図	SB-08実測図(1/60)	19
第16図	SB-09、SX-102実測図(1/60)	20
第17図	溝状遺構配置図(1/60)	21
第18図	SD-107土器出土状況図(1/20)	22
第19図	SX-102実測図(1/20)	23
第20図	出土遺物実測図①(1/4)	25
第21図	出土遺物実測図②(1/4)	26
第22図	出土遺物実測図③(1/4)	27
第23図	出土遺物実測図④(2/3)	28

表目次

第1表	出土遺物観察表①	29
第2表	出土遺物観察表②	30
第3表	出土遺物観察表③	31

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経過

福岡市農業組合営農課から前原市大字泊字桂木757番地他における埋蔵文化財発掘の届出が提出されたのは平成7年8月13日のことである。開発目的は倉庫を新規に建設するため、既存の穀物倉庫の東側に建設する計画であった(第1図)。

元岡地区は福岡都市圏の生鮮農作物の供給基地として知られている。一帯では、米だけでなく、野菜、柑橘類等の商品作物も多く生産している。最近では消費者ニーズの多様化に対応するため、さまざまな作物が四季を通じて生産、出荷されており、計画的に出荷するための一時保管施設の拡充整備が急務とされており、今回の倉庫建設もその一環の事業とされる。

市教育委員会は建設予定地の試掘調査を実施し、倉庫建築予定地下で埋蔵文化財の包蔵を確認したため、その旨を組合側に伝えるとともに、遺跡の保存方法について協議を持つこととなった。

まず、倉庫建設にあたり現況地盤から80cmの深さに達する基礎が予定されているため設計変更の可能性について協議した。しかし建物の用途、構造上、設計の変更は難しいとの回答を受け、建物数については発掘調査の実施は免れないと判断するにいたった。

次に、開発地はまさに前原市と福岡市の境界に位置し、敷地の一部は福岡市側にかかっていた。また、開発者が福岡市農協であったため、調査の主体は前原市とするのか福岡市とするのか問題となった。しかし、双方の教育委員会を交えて協議した結果、調査対象地の大半が前原市側にあり、今回のような小規模の開発では、調査は主に調査地点が所在する前原市において担当するのが妥当であるとの結論に達したため、前原市が調査を実施することとなった。

その後、市教育委員会と福岡市農協との間で数回にわたる協議を行い、工程、予算等において細部まで合意に達し、平成7年10月13日に調査委託契約を締結し、調査を実施することとなった。

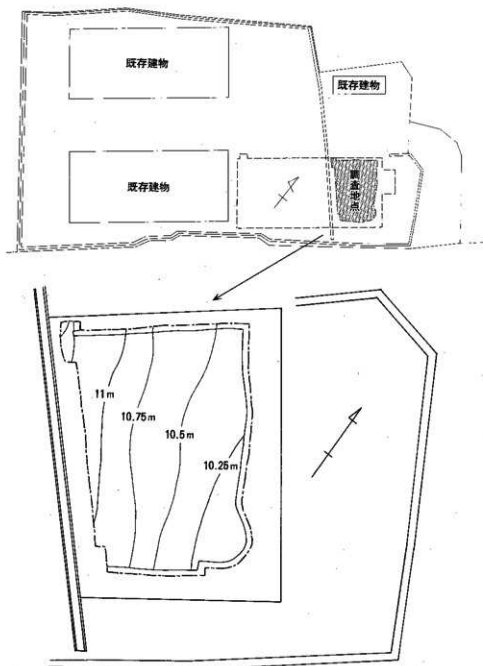
調査は平成7年10月17日から同年12月18日まで実施し、翌平成8年度に資料整理および発掘調査報告書を作成することとなった。

2. 調査の組織

泊桂木遺跡調査にかかる平成7、8年度の調査組織は以下のとおりである。

調査主体	前原市教育委員会	
総括	教育長	榑木昭生
	教育部長	中原直國
	文化課長	井上 尚(平成7年度)
		岡本宗嗣(平成8年度)
	文化財係長	川村 博
調査	文化財係	岡部裕俊、野田純子
庶務	文化振興係長	宮本洋子

- 現場作業員 竹原ひとみ、木地純子、富岡美佐枝、中庭ヨモト、瀬戸きよ子、行弘カツ子
 谷山セツ子、杉本美知子、柴崎末子、篠原明子、川西安子、田中きぬ子、
 重富千恵子、稲原フジエ
- 整理補助員 平尾和久
- 遺物整理作業 高田とよみ、大塚房子、青木しげ子、友池真由美、後藤雅子、飯千孝子、
 屋久江里子、川上辰子、山口敏子、豊樹美智子、中田朋子、藤木和子、
 島影やよい、

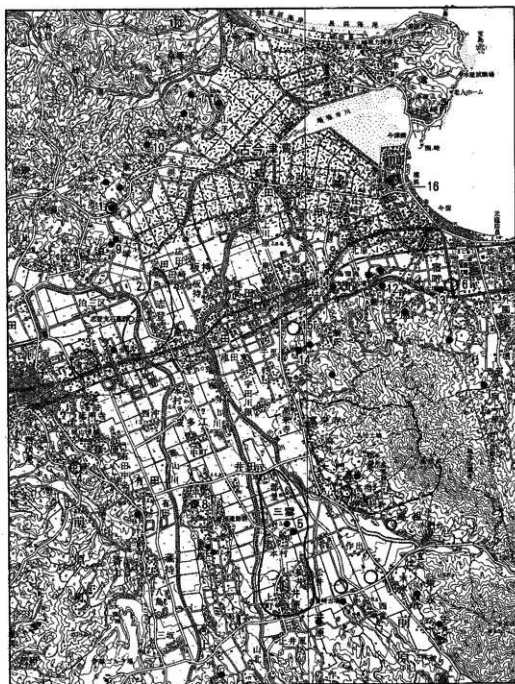


第1図 敷地内における発掘調査地点の位置
 (等高線は弥生~古墳時代遺構面の計測値)

第2章 調査の記録

1. 位置と環境

泊地区は前原市の北端に位置する。北は志摩町、東は福岡市に接しており三市町の行政境界地点である。現在、計画が進められている九州大学の新キャンパス予定地である福岡市元岡、桑原地区と隣接する。地形的には志摩半島の南基部に位置している。半島を形成する低山塊の南端丘陵地に



第2図 泊桂木遺跡の位置と周辺の主な遺跡 (1/60000、○は弥生時代の遺跡 ●は前方後円墳)

位置し、その南裾には標高6m以下の東西に抜ける帯状低地帯が広がる。

『筑前国統風土記』によれば、この地は江戸時代には旧志摩郡に属していたとされ、古来大陸、朝鮮半島からの船が入港する港であったことが村名の由来であると記されている。また、南部の帯状低地帯を江戸時代には「中通^{ナカド}」と呼んでいたらしい。この「中通」はつい最近まで、古代において低地帯を東西に抜ける糸島水道と名付けた海峡があったと考えられていた。しかし下山正一らによる貝化石層分布調査、地質構造の調査が行われ、今津と加布里から大きく湾入していたことは確認されたが、泊^{ウラ}～志登間では貝化石層の分布が途切れていることが判明し、水道の存在には否定的な見解が導かれていた。氏の分析による地下貝層の分布域はまさに当地域における弥生～古墳時代遺跡が分布しない地域の範囲とよく合致し、氏の検討結果とうまく整合する。この成果を援用すれば泊地区は加布里、今津の東西両湾の最深部を同時に見下ろせる地点に位置することになる。この東西二つの湾が糸島地方の古代史上で重要な役割をもっていたことは旧海岸添いの丘陵上に多くの貴重な古代遺跡が分布することからも十分にうかがえる。また、船の停泊地を示す「泊」の地名は海上交通の要衝であることを十分に暗示している。また、この地域は今津、加布里両湾の東西海上交通の中継所というだけでなく志麻半島と怡土地方を結ぶ南北交通の要所としても重要な役割を担っていたと考えられる。

泊地区および周辺地区の個々の遺跡を拾いあげてみると、狭い地域であるにもかかわらず、貴重な遺跡が数多く立地することに改めて驚かされる。なかでも弥生時代から古墳時代にかけての遺跡、遺物に注目されるものが多い。しかし丘陵地の多くは1960年代を中心にみかん園などの農地として開墾されており、多くの遺跡が十分な調査が行われないまま破壊の憂き目にあい、いにしへの地形を残す地所が残りわずかとなってしまったのは今となっては残念なことである。

弥生時代の資料は丘陵上の各地から弥生土器出土の情報があり、多くの遺跡の存在が推定されるが、発掘調査が行われたものは少なく詳細は明らかでないものが多い。その中であって注目されるものに、泊字熊野出土の弥生後期甕棺墓がある。発見当時の状況を知る楠原和彦氏によれば、丘の上から単独で発見されたという。現在、2個の甕棺が県立糸島高等学校の郷土博物館に保管されている(第4図)。いずれも「1965年泊熊野出土」の注記が残り、ほぼ出土当時の姿を保っている。

1は現存高44.2cm、胴部最大径53.6cm、底部は径7.6cmほどを測る。平底であるが胴部との境はやや丸みを帯び、丸底化への兆候が認められる。胴下部は直線的に膨らみ最大径部からはやや立ち上がりぎみに打ち欠き部へとびる。最大径部直下に2条の角が鈍い断面台形状の突帯がめぐる。外面上半部にはタテハケが、内面は下半部にナナメハケ、最大径部ではヨコハケ、上部ではタテハケが残る。2は現存高48.6cm、胴最大径52.2cmを測る。底部は径10.4cmほどで、平底であるが胴部との境はややまるみを帯びる状態は1と同じである。胴下の膨らみは1に比べややまるみを持ち、上部も1より大きく内傾するため、打ち欠き部の口径は1よりも小さい。胴部の突帯は断面台形の突帯が1条である。内外面ともにタテハケを残している。1、2ともに内面には全面に朱が塗布されている。

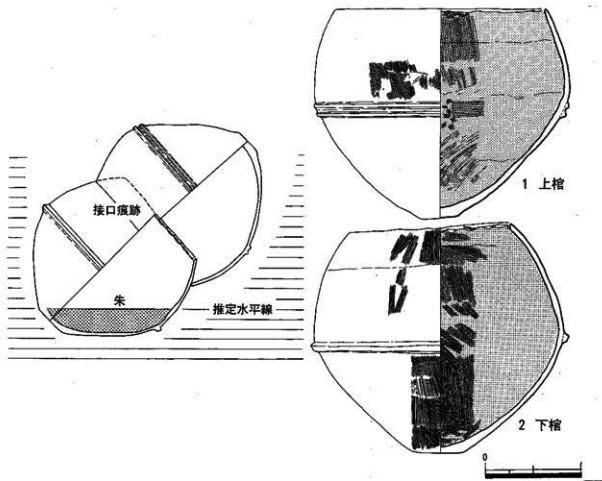
2には外面に接口痕跡が明瞭に残っており棺の接口状況の復元が可能である。また棺の内底部には概算で3000ccを越える水銀朱が土器の水平軸に対して約42度の傾斜をもって沈殿していたようである。これらの状況から甕棺の埋置状況は3のように推定される。

棺に使用された土器は上下棺ともに胴部が大きく膨らんでおり、壺であることは疑いの余地はな

いが、いずれも頸部下で丁寧に打ち欠かれており、口頸部の旧形はわかりにくく、器形、時機ともに判断しづらい。しかし、近年、同様な特徴を有する土器を用いた甕棺が糸島各地で確認されているので、遺存状況の良好な3例（第5図）と比較してみる。

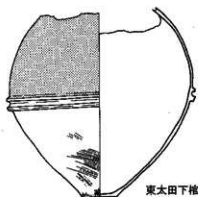
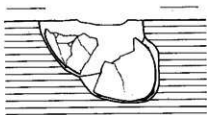
東太田の1号墓はほぼ同サイズの頸部打ち欠き棺を合わせている。器壁は薄く、図示した下棺の外面上半部は朱塗りである。井原D地点の2号墓は下棺に二重口縁壺を用いている。上棺は打ち欠いた口頸部の一部が墓穴内から出土し、口頸部の旧形がわかる貴重な資料である。いずれも棺全長1mにも満たない小型で、中期の成人用甕棺棺とは系譜上一線を画すものの、3例とも棺周辺から甕、壺、高杯を転用した小型棺が出土しており、成人用の棺として使用されたと考えられる。棺の時機について、土器を弥生中期の広口壺からの変化系としてとらえると、概して東太田、井原D例は弥生中期の系譜を色濃く残し、つくりも丁寧に丁寧であるが、飯氏、泊例は外面調整が荒く器厚も厚めで、泊例は胸部の重心が下方に下がりが下半部のまるみがかかなり増している。棺の変遷は東太田1号→井原D 2号→飯氏Ⅱ27号→泊熊野とみられる。泊熊野墓は時機的には宮井善郎氏が想定している下大隈期のなかでも新段階を下限として押さえておきたい。

甕棺の底に厚さ10cmほどに沈殿した水銀朱は現在までに発見された弥生時代の甕棺内発見例としては他に例をみない多量のものである。副葬物と考えて然るべきと考える。熊野例に若干先行する飯氏Ⅱ7号墓では棺内に長宜子孫系内行花文鏡が副葬されていた。糸島地方の当該期における甕棺の成立過程、変遷については再考の余地がある。



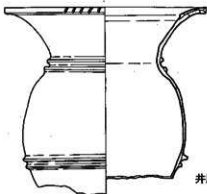
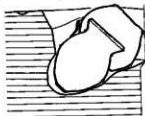
第4図 泊熊野甕棺墓の埋納状況の推定 (1/12) と土器実測図 (1/8)

東太田遺跡第3地点1号雙棺墓

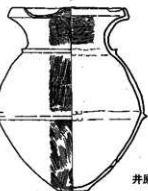


東太田下棺

井原遺跡群D地区2号雙棺墓



井原D上棺

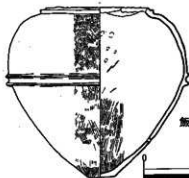


井原D下棺

飯氏遺跡群II区27号雙棺墓



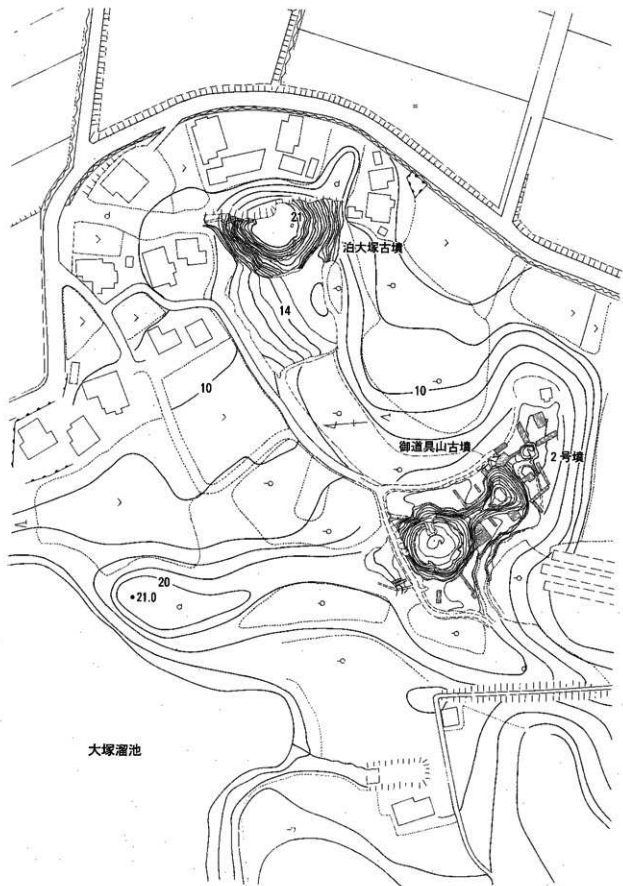
飯氏II区上棺



飯氏II区下棺



第5図 泊熊野塚棺墓に類似する雙棺墓例（遺構断面図は1/30 土器実測図は1/12に統一し作成）



第6図 泊大塚古墳群における古墳の配置 (1/1500、前原市都市計画図と墳丘図を合成して作成)

古墳時代の遺跡として、まず糸島最古の前方後円墳とされる御道具山古墳が重要であろう。字大塚に位置し、1983年の現況測量に続いて1986年に市教育委員会が墳丘形態、規模の確認調査を実施した。その結果、全長65m、後円径40m、前方部幅25m、くびれ部幅19mを測り前方端がバチ形に開く前方後円墳であることを確認した。後円基底部には葺石も巡る。墳裾から出土した土師器から布留式古段階に位置付けられる。

また、前方部の前面で確認した方墳は玄武岩板石を用いた箱式石棺を主体部とすることも確認された。棺は盗掘により大破していたが、棺材に赤色顔料が塗布されていたことが確認された。掘り方の攪乱土壌からは2本分の鉄剣片が出土した。高橋健自は字大塚の丘陵上に社殿を載せた円墳があり、その撤去の際に地下30～60cmから内面に朱を塗った組合せ式箱式石棺の出土、棺内から細形銅剣2本が管玉1個とともに出土の情報を報告しているが、現在この古墳の位置や銅剣の所在は明らかではない。高橋には鉄剣出土の情報が誤って伝えられた可能性もあり。また、これに関連して、中山平次郎もその西隣で高さ2m足らずの小円墳から朱塗りの箱式石棺が出土したことを報告しており、一帯に箱式石棺をもつ低墳丘の古墳が複数存在した可能性もある。

泊大塚古墳は御道具山古墳の北西100mに隣接する前方後円墳である。現在、前方部と後円部の東半部が削平されており、旧状は明らかにしがたいが、1987年に実施した測量調査によって推定後円径45m、高さ8mをはかる2段築成の前方後円墳であることが判明した。後円径は三雲嶺山古墳のそれを上回る。現在の市道も古墳の後円部裾のさらに外側に大きく迂回していて、古くから大型古墳であることが認識されていたことを伺わせる。後円部墳丘斜面の勾配は比較的なだらかで、墳頂には径18mほどの平坦面があり古式の古墳の様相をみせる。くびれ部付近の墳丘崖面観察から1段め斜面に葺石があることも確認された。しかし、埴輪は認められない。築造時期については立地から後道具山古墳よりも下り、また埴輪をもたないことから近隣の元岡池の浦古墳よりも先行する4世紀後半と考えられる。

泊城崎古墳は字城崎の丘陵東端部に位置する径32m以上の円墳であった。農地造成によって消滅したが、葺石を有し、周溝から鉄斧、鉄鎌、陶質土器、土師器等が出土している³⁸。

大日古墳の所在地は今に字名を残す現泊保育園付近ではないかも推測するが故原田大六氏は城崎古墳をその候補にあてている。明治42年に主体部から径22cmの2面の同形の半肉彫獣帯鏡、環頭大刀、管玉15、勾玉1が出土したとされる³⁹が、出土遺物の所在は明らかでない。

伝泊一区出土の半肉彫獣帯鏡は面径17.7cm。一部欠損している。鏡背に複数枚の布、朱が付着している。箱式石棺出土とされるが詳細は不明。糸島高等学校郷土博物館に保管されている⁴⁰。

律令下では志麻郡に位置したこの地は、大寶2年の銘が記された日本最古の戸籍に名を残す嶋部大領「肥君猪手」の所領地、「川邊里」の比定地の一部でもある。

泊丘陵先端から東1,100mには延喜式内社である志登神社（怡土郡）が鎮座する。祭神は豊玉姫命で、海上交通の安全祈願の神社として古来より信仰を集めていたという。当地の歴史の意義を考える上で極めて示唆的である。

字タチの丘陵上に中世に泊城が築かれたとされるが、その詳細は今後の調査に委ねられる。

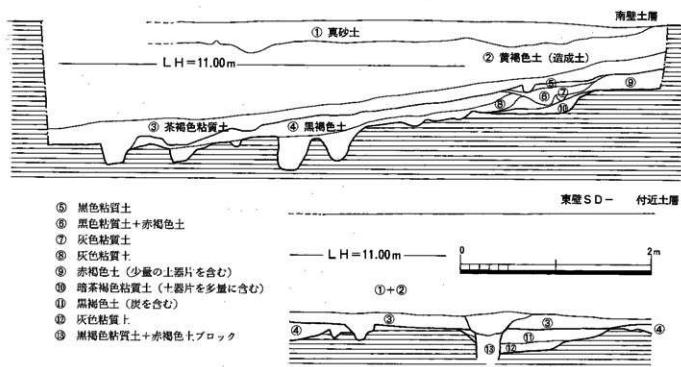
注

- 1 下山正一他「糸島低地帯の完新統および貝化石集団」『九州大文学部研究報告』（地質学）

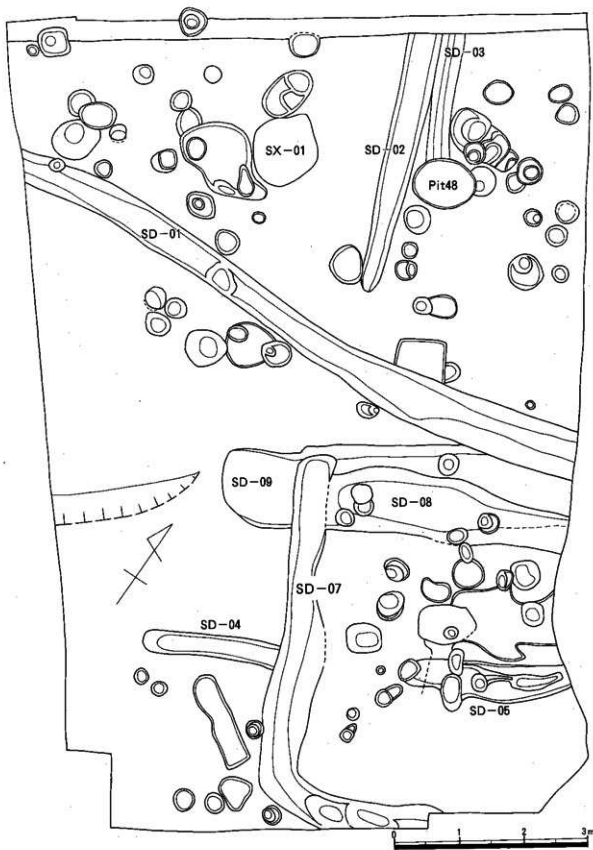
- 2 下山氏は「たとえば海水面が現在より2mほど高い時期に雷山川と盲川とが満潮時には水路として繋がり、干潮時には切れるような状態」(前掲論文から)、あるいは運河掘削による航路の存在した可能性については否定できないとしている(下山氏御教示)。
- 3 本田光子「弥生時代の墳墓出土赤色顔料」『九州考古学』第62号 1988年
- 4 宮井善郎「北部九州の漢鏡」『倭人と鏡』1994年 埋蔵文化財研究会『飯氏遺跡群』1994年 福岡市教育委員会
- 5 宮井善郎前掲
- 6 高橋健自『銅剣の研究』1925年
- 7 中山平次郎「北九州に於ける先史原始史両時代中間の遺物に就いて」『考古学雑誌』第7巻第10号 19年
- 8 柳田康雄「糸島的前方後円墳」『三雲遺跡』Ⅲ 1982年
- 9 原田大六氏は城崎古墳を大日古墳としている(前原町文化財地名表・1972年)が、その根拠は不明である。
- 10 後藤守一「漢式鏡」1926年
- 11 埋蔵文化財研究会『倭人と鏡』1994年

2. 調査の概要

調査地点は北の石ヶ岳から派生するなだらかな丘陵上に位置する。丘陵は南側の県道を挟んでさらに南に延びている。発掘調査は倉庫建物予定地全域約400㎡を対象として行なうこととした(第1図①)。現況は駐車場兼作業用広場として利用されており、表層はアスファルトによる舗装が覆



第7図 調査区南壁・東壁SD-01付近土層図(1/40)



第8図 歴史時代遺構配置図 (1/60)

っていたため、まず、アスファルトを切断除去した後、バックホーを使って掘り下げていった。

西端から表土剥ぎを行なったところ、西半分は表土直下で黄褐色の真砂土があらわれた。倉庫の敷地を造成した際に高所を大きく削平し、谷部にむかって水平に均していたことがわかった。東側の埋め立て地区では遺構が遺存している可能性もある、さらに東に向かって表土を除去していったところ、中途から東に下り勾配をとる緩斜面となった。調査区中央やや東よりを南北に縦断するU字溝下では1 mほどの深さとなり、東端部では深さが2 mに達した。

最終的な調査面積は100㎡ほどとなった(第1図②)。調査地は丘陵の東緩斜面にあたり、遺構面はいま少し東にむかってなだらかに下るが、調査区の東壁付近では斜面の勾配が一段と緩やかになり橙褐色地山が黒色化し滞水していた状況が伺えることから、ほどなく谷底にいたるものと考えられる。

調査地点の基本層位は第7図(図版2-a)に記した。まず真砂土の整地土層下に西側高所から押し込まれた造成土が覆い、その下には旧表土層とみられる茶褐色粘質土層、その下に黒褐色土層(歴史時代遺物包含層)、灰色粘質土層(弥生中期～古墳時代遺物包含層)、橙褐色土層(地山)と続く。

灰色粘質土層からは弥生中期の土器が多量に出土した(図版4-a)が、破断面は摩滅が激しく、接合するものは稀であった。多くが斜面上方から流れ込んだ破損片の2次堆積遺物とみられる。、斜面上方に当該期の集落遺構が広がっていたことをうかがわせる。

茶褐色粘質土層からの出土遺物は少量だったが、炭、須恵器、土師器片、瓦器碗(図版3-b、第20図9)とともに鉄滓が出土しており、周辺に古代から中世にかけての製鉄関連の遺構が存在していたものとみられる。

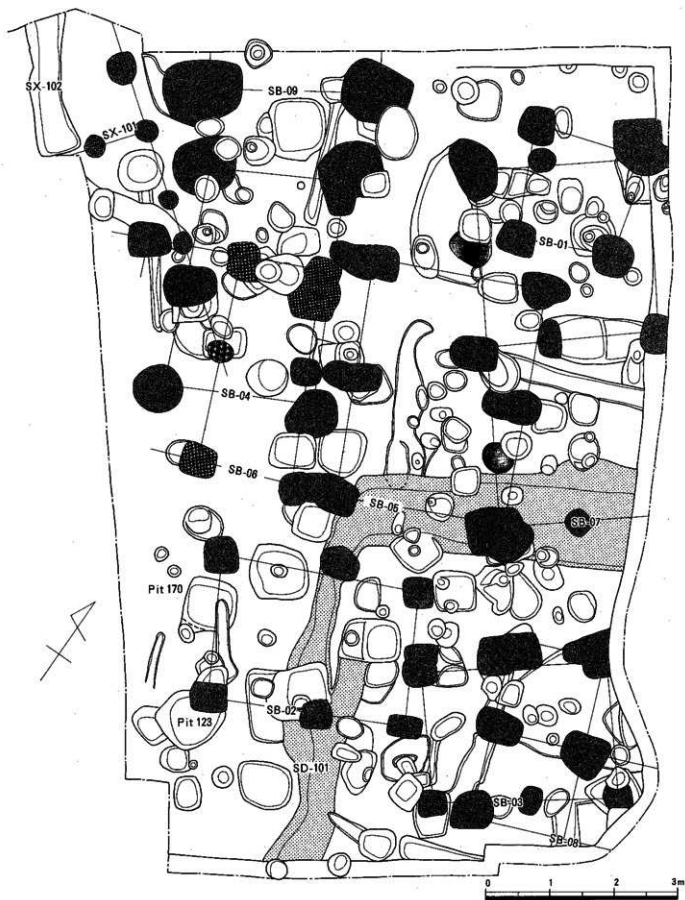
3. 歴史時代の遺構、遺物(第9図, 図版2-b)

歴史時代の遺構は土壌、溝、柱穴等を検出した。柱穴はきれいに並ぶものを検出することができず建物遺構を確認することはできなかった。

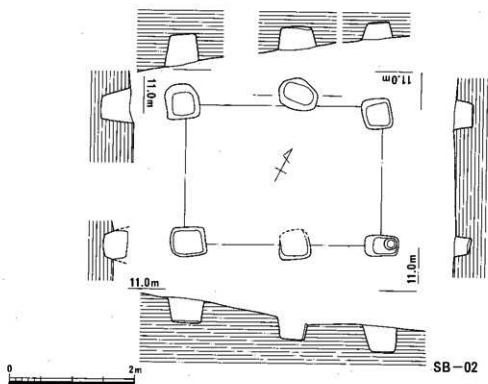
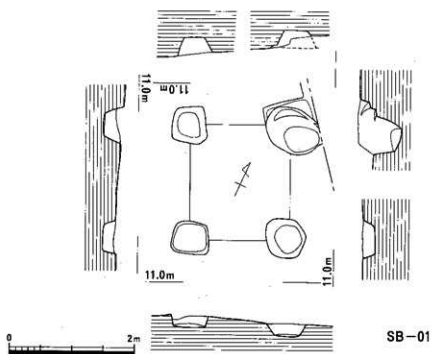
土壌

SX-01(図版3-b)

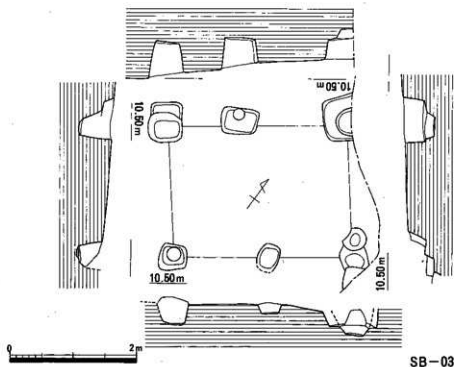
調査区の北部で検出した南北長108cm、幅104cm、深さ25cmの不正長方形の土壌である。遺構検査に黄白色粘土ブロック土が分布していたので、十字にトレンチを設定し壁面を観察してみたところ埋土に黄白色粘土に少量の黒褐色土がブロック状に混入する土壌であることがわかった。埋土は堅くしまりあたかもきつく築き固めた状況がうかがえる。作業床あるいは構造物の基礎的な意味を持つものと考えられる。上面包含層から出土した鉄滓との関連が注目される。埋土には弥生土器片が多く含まれていたが、時期を決定づけるものはなかった。



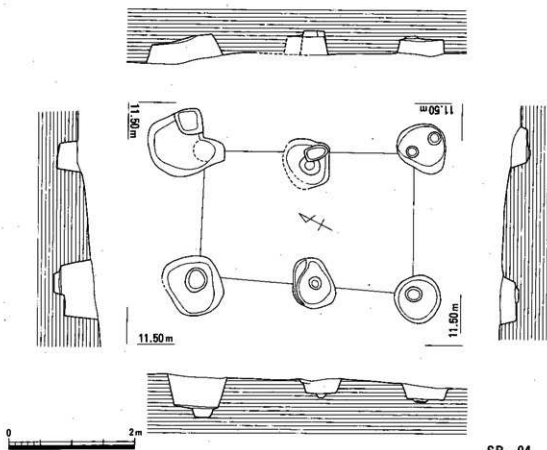
第9図 弥生~古墳時代の掘立柱建物等配置図(1/60)



第10圖 SB-01, 02 実測図 (1/60)

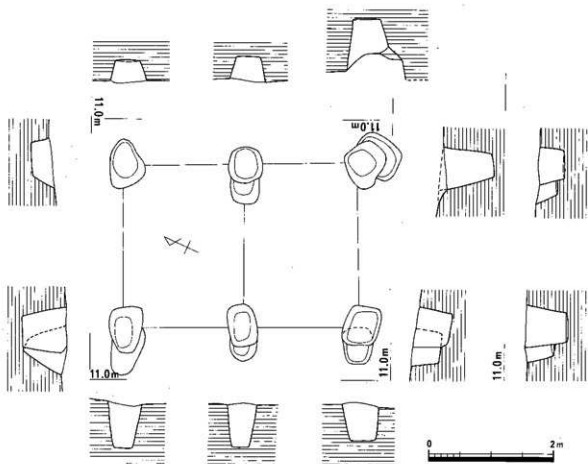


SB-03



SB-04

第11圖 SB-03, 04 実測圖 (1/60)



第12図 SB-05 実測図 (1/60)

溝

6条の溝を検出した。調査面積が狭く調査区外まで続くものが多いため、その機能について明らかにし難い。

SD-01

調査区の北西端から南東に下る溝で幅48cm~80cm、深さは39cmほどである。底面は凹凸が激しくでこぼこであった。灰褐色の砂質土が埋土であった。

SD-02

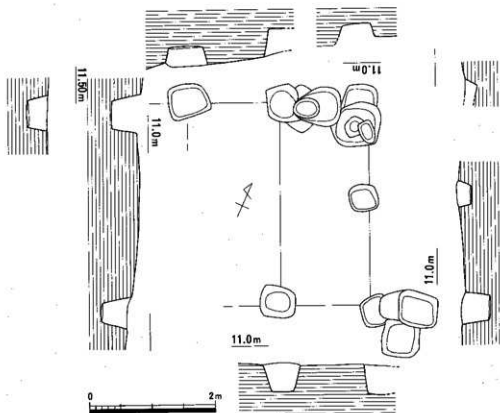
調査区の北壁中央やや東よりから等高線に沿って南にのびる溝で幅32cm~51cm、深さは9cmほどである。中央部で溝は切れているがその延長線上にSD-07があり、本来同時に機能した溝であった可能性がある。

SD-03

SD-02に切られる溝で幅33cm、深さ11cmを測る。Pit48にぶつかって止まっているが遺構の切り合いは判然としなない。

SD-04

調査区の西南部で検出したSD-07に直行方向に掘られた溝であるがSD-05につながる可能性



第13図 SB-06 実測図 (1/60)

ある。幅36cm、深さ4cmほどである

SD-05

SD-07に直行方向に掘られた溝で幅はもっとも広いところで90cm、深さはもっとも深いところで15cmを測る。SD-04と同一線上にあり、本来同一遺構であった可能性がある。

SD-06

SD-05の北に並ぶ不整形の溝で、幅は広いところで120cm、深さは深いところでも4cmを測る程度である。

SD-07

調査区の中央から等高線に平行に南にのび、南壁付近で90°東に屈曲する溝で幅42cm~72cm、深さは深みで13cmほどである。北端にはSD-08があり、平面プランが「コ」字形の本来連続する溝遺構であった可能性が高い。この2条の溝に囲まれた内区は南北長4.2mでこの字形に区画しており、建物遺構の排水溝の可能性があるが調査区内では明確な柱穴列や建物遺構等は確認できなかった。

SD-08

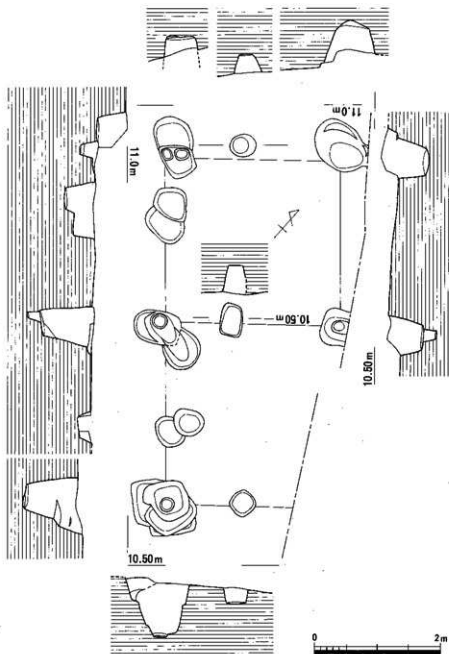
調査区中央を等高線と直交して東西に掘られた浅い溝で幅140cm、深さは東端で26cmに達する。掘り方は現状は北にテラス面を設ける2段掘り状態を示すが、掘り返されたために2段になったものであり、上層はSD-07と同時に機能していたものと考えられる。

SD-09

SD-08に切られる幅106cm、深さはもっとも深いところで52cmほどを測る。

4. 弥生～古墳時代の遺構、遺物

歴史時代の遺構分布に比べると著しく遺構の分布密度が高く、一帯が当概期の大規模な集落であった可能性が出てきたことは注目される。遺構の内容としては掘立柱建物の柱穴が多く相互の切り合いが激しかった。掘立柱建物9棟、柱穴列、土塹、溝、柱穴等を調査したが、掘立柱建物の多く



第14図 SB-07 実測図 (1/60)

はプランが調査区外にさらに広がっているものとみられ、建物の主軸方位、規模についても現況では判断がつかないものが多かった。

掘立柱建物

SB-01

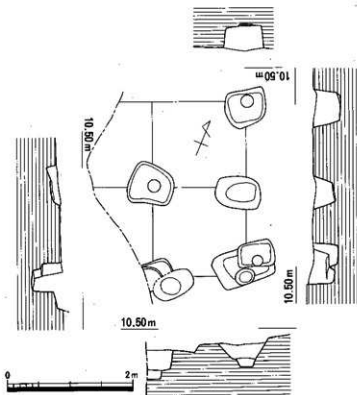
調査区の北東隅で検出した建物で、現状では1間×1間で梁行184cm、見た目の桁行は162cmを測り、梁行方位はN22°Wにとるが、北あるいは東側にプランは拡大する可能性がある。柱穴は不正長方形プランを呈する。5号建物に切られる。埋土中から弥生土器片が出土している(第21図10~16)。

SB-02

調査区の南西部で検出した建物である。平面プランは1間×2間で、梁行320cm、桁行は226cmを測り、梁行方位はN63°Eにとる。柱穴は方形ないしは長方形プランで掘り方は小さめである。Pit186はやや北に張り出している。柱痕跡は確認できなかった。埋土からは弥生後期土器片が出土している(第21図17~28)。

SB-03

SB02の東で検出した建物で、現状での平面プランは1間×2間。梁行286cm、桁行は206cmを測り建物プランははさらに東、南にのびる可能性がある。梁行方位はN55°Eにとるが、柱穴は不正長方形プランである。柱痕跡は確認できなかった。SD-101はこの建物にともなう排水溝の可能



第15図 SB-08 実測図 (1/60)

性がある。SB-08を切る。埋土から古式土師器の高杯片が出土している（第21図29～34）。

SB-04

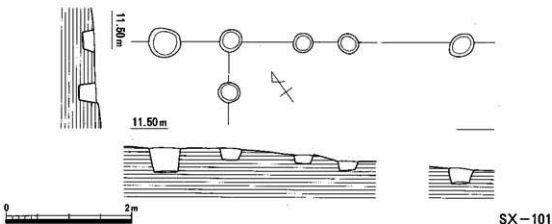
調査区の北西部で検出した1間×2間の建物で、見かけの梁行340cm、桁行208cmを測り、梁行方位はN22°Wにとる。柱穴掘り方は円形ないしは不正方形プランで径（一辺）90cm程度を測る大型である。柱痕跡あるいは柱圧痕をすべてのPitで確認したが、径はふぞろいである。Pit106、24では抜き取り痕も確認された。埋土から弥生後期土器片が出土している（第21図35～46）。

SB-05

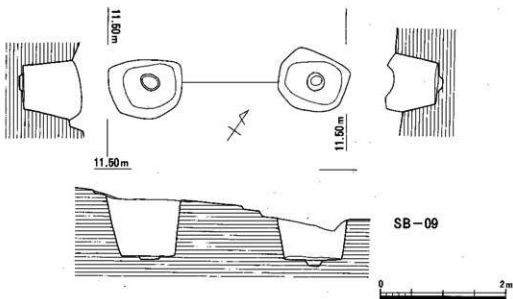
調査区の中央やや東よりで検出した1間×2間の建物で、梁行380cm、桁行264cmを測り、梁行方位はN25°Eにとる。柱穴は不正長方形プランで梁行方向に細長く掘られる。すべて柱の西側に抜き取り痕が掘られていた。埋土から弥生中期土器刃が出土している（第21図47～57）。

SB-06

SB-04に切られる建物で、見かけの長さは330cm、幅290cmを測る。柱穴掘り方は不正方形プラン

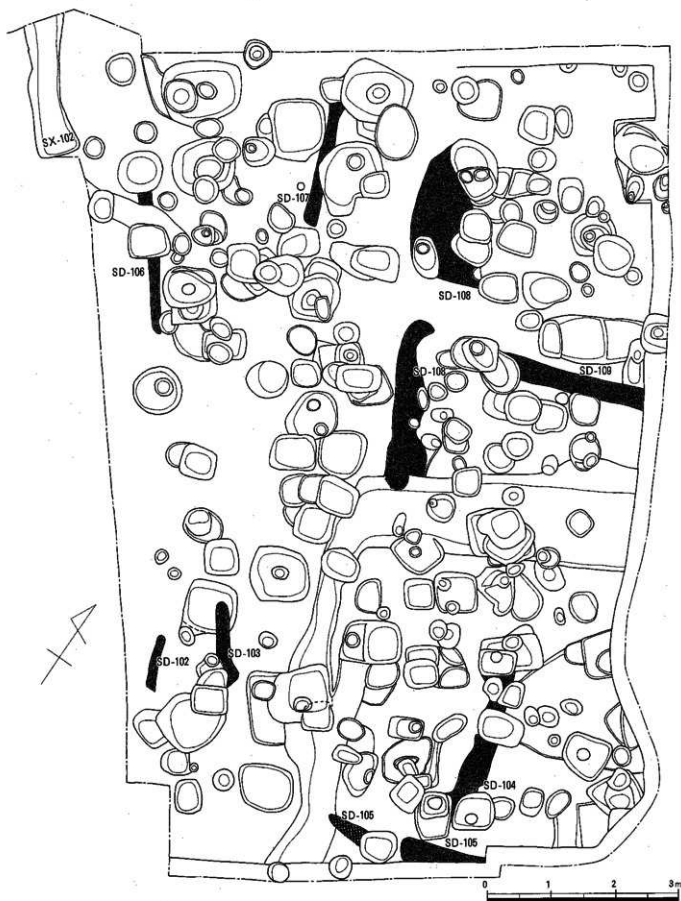


SX-101



SB-09

第16図 SX-101, SB-09 実測図 (1/60)



第17圖 溝状遺構配置圖 (1/60)

ンである。主軸方位はN66° Wぐらいであろうか。埋土から弥生後期土器片が出土している（第22図58～63）。

S B-07

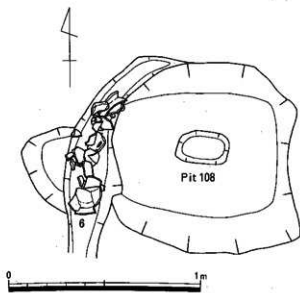
調査区の北東に位置し、一部は東調査区外に続く。S B-01の掘り方を切るもののS B-05に切られる。見かけの建物長560cm、幅278cm、柱掘り方は浅い。柱間の平均は280cm前後。柱根径は24cm前後が中心である。Pit160、191、193の柱穴は抜き取られていた。主軸方位はN50° Eを計る。埋土から弥生後期土器片が出土している（第22図64～73）。

S B-08

調査区の南東隅で検出した建物。みかけのプランは1間×2間で、南北長梁行280cm、幅は148cmを測り、梁行方位はN67° Eにとるが、建物プランははさらに東あるいは南に拡大する可能性がある。柱穴は不正形の長方形プランである。Pit205、224、231では径20cmほどを測る柱痕跡を確認した。S B-03に切られる。埋土から弥生後期土器片が出土している（第22図74～78）

S B-09

調査区の北壁に接して2個のややいびつな長方形プランの大形の柱掘り方を検出した。Pit96は長軸長118cm、短軸幅96cm、深さ100cmを測り、掘り方中央に長径30cm 短径26cmの柱痕跡が残っていた。（図版6-a）またPit170は長軸長112cm、短軸幅96cm、深さ68cmを測り、径30cmほどの円形の柱痕跡を残していた。柱痕跡間の距離は266cmである。大型建物の柱穴と考えられるが、柱穴、柱痕跡ともに他のものより著しく大きい。2柱穴の両脇からはこれに続く柱穴が 確認されなかったことから、北側の調査区外に建物が続くものとする。埋土から弥生後期土器片が出土している（第22図79～89）



第18図 SD-107 土器出土状況図 (1/20)

溝状遺構 (第17図)

9条の中小の溝状遺構を検出した。SD-101以外はいずれも部分的、突発的に掘り込まれ、等高線に並行ないしは直交している。また、SD-104、107、108では内部から土器片がかなりまとまって出土し、溝周囲に小Pitの集中傾向がうかがえることから、生活居住遺構の周溝、あるいは排水施設的な機能が推定される。

SD-101

調査区の東南部で確認した溝で南壁から等高線に沿って北に伸びた後、L字形に屈曲して斜面を下る。あたかもSB-03を囲むようにめぐっており、同建物にめぐらされた排水施設であるとみられる。

SD-102, 103

調査区の南西隅で検出した細く浅い溝である。103の一端は方形を呈する。

SD-104, 105

SB-03、08に切られる。104では埋土から弥生中期の甕片が出土した。

SD-106, 107 (第18図)

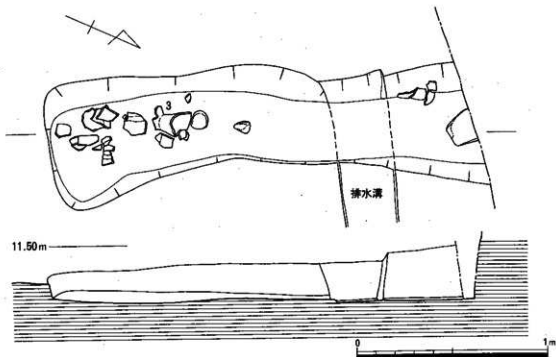
調査区の北西隅で検出した。SD-106、107はSB-09に切られている。溝内から弥生土器が出土している。

出土土器 (第20図6)

甕である。内外面とも粗いハケ仕上げである。底部は平底で胴部に直線的に外傾する。

SD-108, 109

不正形な浅い溝である108の東側の斜面下中途から下方に向かって掘り込まれた断面「コ」字形の小溝である。土器はSD-108の北端から細片がまとまって出土した。



第19図 SX-102 実測図 (1/20)

その他の遺構、遺物

SX-101 (第16図)

調査区の北西隅で検出した円形プランの柱穴の列である。柱穴列の延長方向はN-55°-Wである。柱穴の径は20cm~38cm程度、各柱の間隔は50cmから124cmと一定しない。柱痕跡は確認できなかった。

SX-102 (第19図)

調査区の北西隅で検出した溝条の細長い土壇である。北端はさらに調査区外へのびる。幅は最大68cm、深さは最深部で30cmを測る。埋土中から古式は土師器が出土したが、劣化が進み現地で取り上げることができたのはごく一部であった。現地では甕、小型丸底壺、器台等を確認している。

出土土器 (第20図1~8)

全般的に器壁の剥落が著しく遺存状況が悪い。1、2は甕である。胴部内面は丁寧なヘラケズリ、口縁端部は断面「コ」字形に仕上げているややあまい。3は器台、4は支脚、5は高杯脚、7は二重口縁壺である。8は混入した弥生土器である。

SX-103 (図版8-a)

調査区南部で検出した。方形の土壇で掘り方内には白色粘土が充填、築き固められ、上面中央に柱根斥痕が鮮明に残っていた。用途については明らかでない。

石器、鉄器

包含層および柱穴、土壇、埋土から石器が出土している。

1は、黒曜石製石刃である。残存長4.3cm、幅2.3cmを計る。

2~4は黒曜石製打製石鏃である。

5、9、10は石錘である。5は、長さ6.9cm、扁平な川原石の両端を打ち欠いたもの。9、10は溝を刻んだものである。9は長さ4.9cm 長軸方向のみ溝を彫るのに対し、10は長さ3.6cm、十字に溝を刻む。

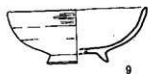
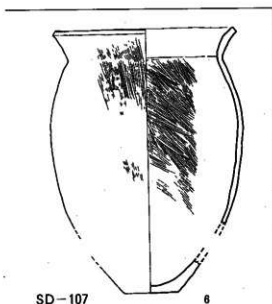
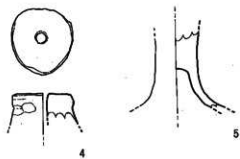
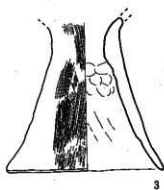
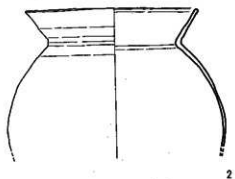
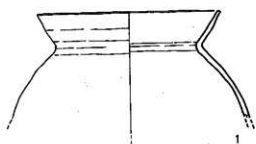
6は、頁岩製の磨製石斧である。残存長7.5cm、刃部は欠失している。

7は、輝緑凝灰岩製の石包丁片である。残存長7.2cm

8は、片磨岩製の紡錘車片である。

11は、砂岩製の砥石片である。

SX-102

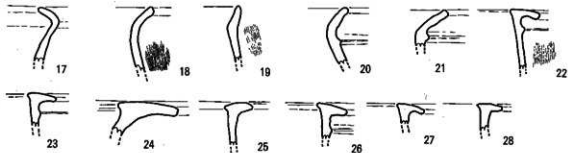


歴史時代包含層

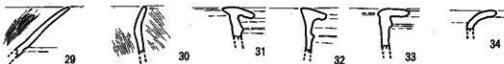
SB-01



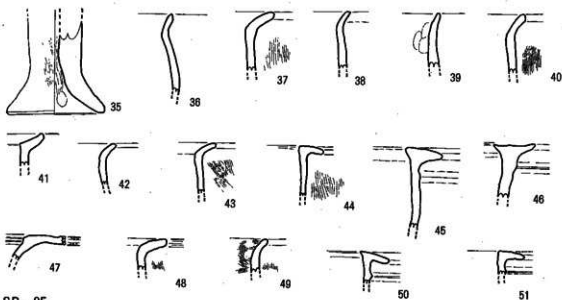
SB-02



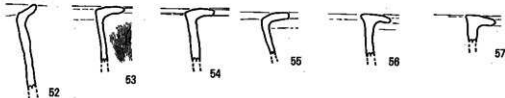
SB-03



SB-04

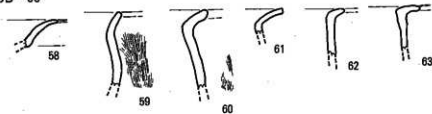


SB-05

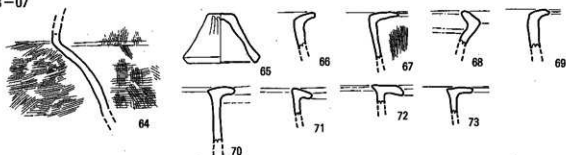


第21图 出土遺物実測図② (1/4)

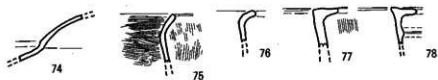
SB-06



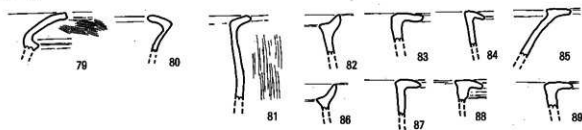
SB-07



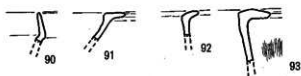
SB-08

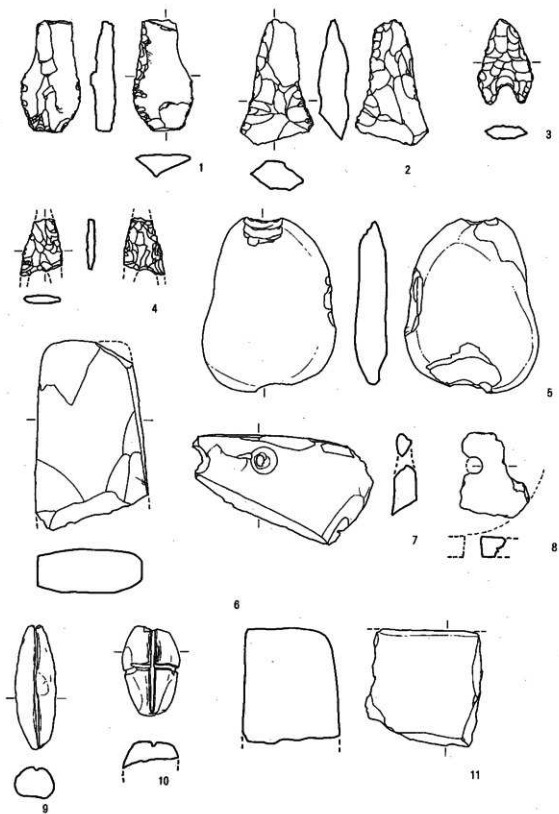


SB-09



SX-101





第23图 出土遺物実測図④ (2/3)

第3章 おわりに

今回の調査によって、調査地点一帯に弥生時代～古墳時代、歴史時代の集落、生産遺構群が遺存していることが判明した。とりわけ弥生後期～古墳前期にかけてとみられる柱穴群はかなり密度の高い分布状況を示し、当該期の当地の集落としての繁栄を物語る。残念ながら、調査面積が100㎡ほどであったため遺跡の詳細については明らかにしがたいが、以下、調査結果で留意すべき点をいくつか述べておきたい。

弥生～古墳時代

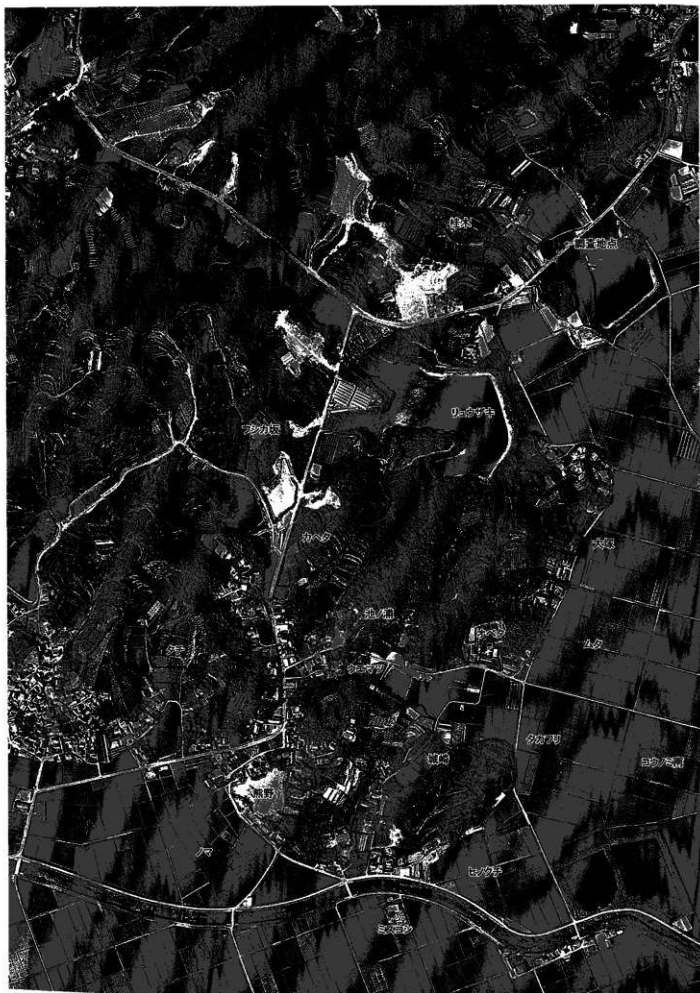
歴史時代遺構下の遺物包含層、ならびに遺構埋土から弥生時代中期を中心とした細かに破碎した遺物片が多量に出上した。表面ならびに破碎面の磨耗が著しく、斜面上方から流下物とみられる。また遺物の中には石包丁、石斧片など弥生中期前半期の資料がみられ、当該期の集落が丘陵高所に存在したことを物語る。また、石錘が数点出土しており、古代において遺跡近くまで今津湾、加布里湾が湾入していたことを考慮すれば漁業も生業として大きなウェートを占めていたことも想像に難くない。御道具山古墳の周辺でも弥生中期の土器が多数出土しており、泊地区の丘陵各所に弥生時代の集落が点々と分布していたことがうかがえよう。

調査地点では弥生後期～古墳時代の9棟の掘立柱建物を検出したが、竪穴住居は確認できなかった。柱穴の遺存状況からみて、削平などによる遺構の消失は考えにくく、本来調査区付近では竪穴住居はなかったとみてよい。調査地点は丘陵の東斜面の裾、谷底近くに位置している。遺構に堆積した土壌も粘土質の二次堆積土壌が覆い、立地的にはお世辞にも生活に適した場所とはいえない。にもかかわらず建物の柱痕跡から推定される柱根径は20～30cmで比較的大型の柱が多く、とりわけSD-101が周囲をめぐるSB-08は総柱の建物であり、他の建物とは一線を画す。また、溝状遺構と柱穴の分布状況から複数の平地式住居の存在も推定される。しかし、谷間の狭地に築かれたこれら建物群の機能、意義については、志登、元岡地区等、周辺の集落遺跡の動態や前期古墳の築造等も見据えた検討が必要である。

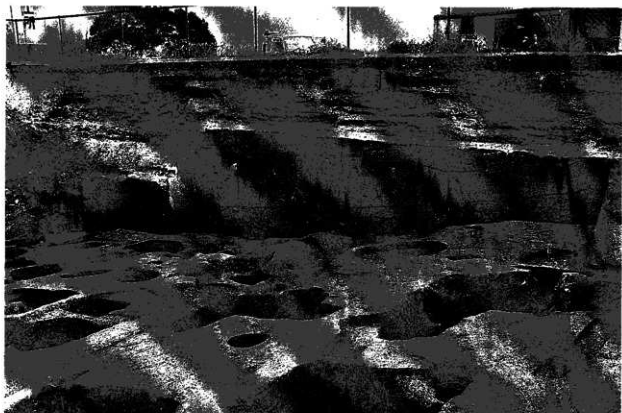
歴史時代

包含層埋土から鉄塞が出土している。遺構としては確認できなかったが当地に鉄生産にかかる遺構が存在したことは疑いない。志麻半島では八熊遺跡をはじめとして各地から歴史時代の鉄生産遺構が発見されており、怡土地域でも類例は増加している。今後、怡土志摩全域を巻き込んだ古代鉄生産についての論議が必要であろう。

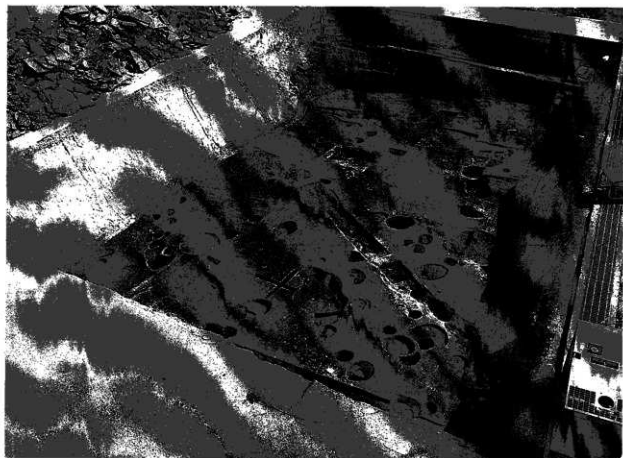
图 版



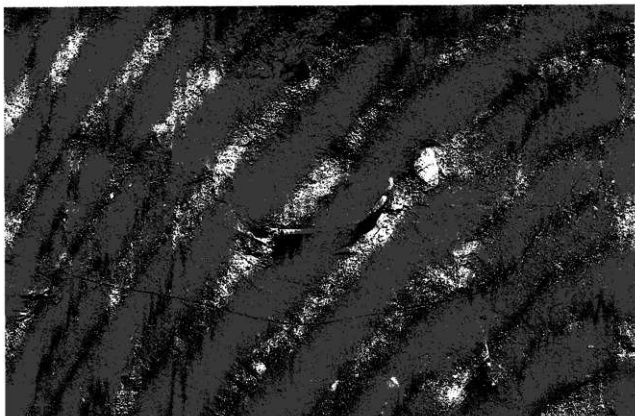
泊佳木遺跡周辺の航空写真（昭和48年撮影）



a. 南壁土層断面



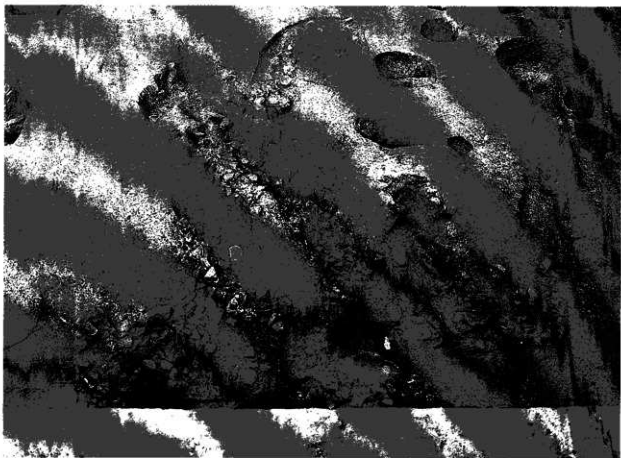
b. 歴史時代の遺構面完掘状況（北西から）



a. 歴史時代包含層瓦器検出土状況



b. SX-01断ち割り状況



a. 弥生～古墳時代土器包含層土器出土状況（南から）



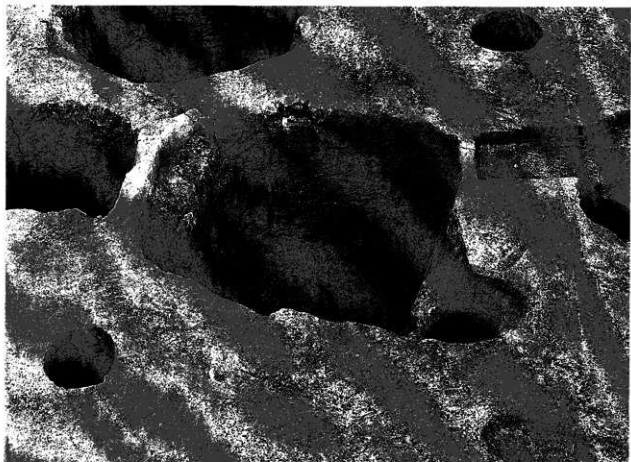
b. 弥生時代～古墳時代遺構調査状況



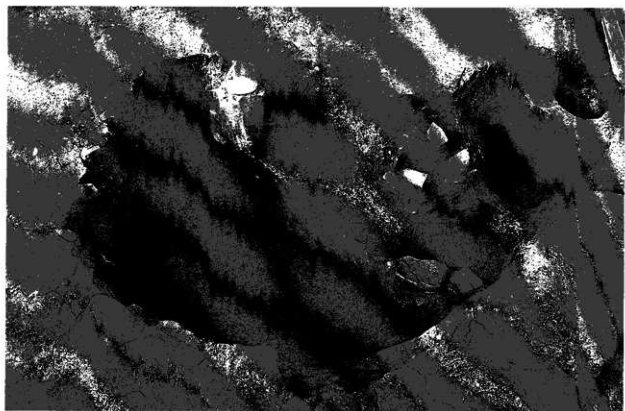
a. SD-107 土器出土状況（北から）



b. SD-107 土器出土状況（東から）



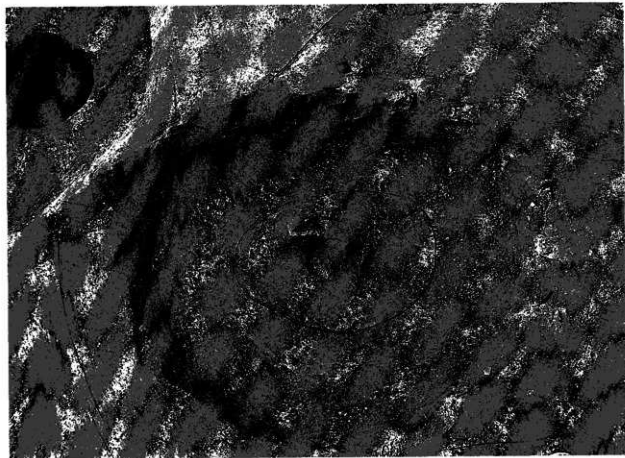
a. Pit170 完掘状况



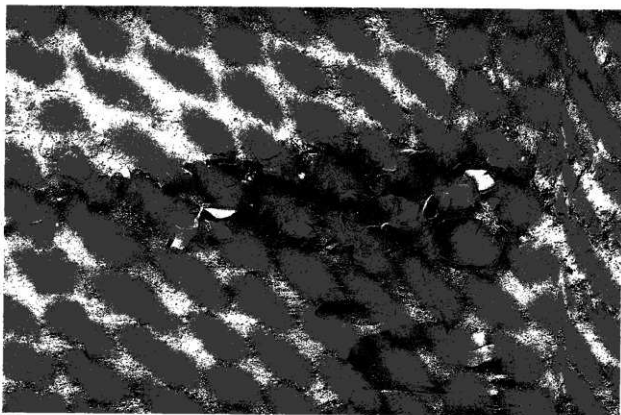
a. Pit123 下層土器出土状况



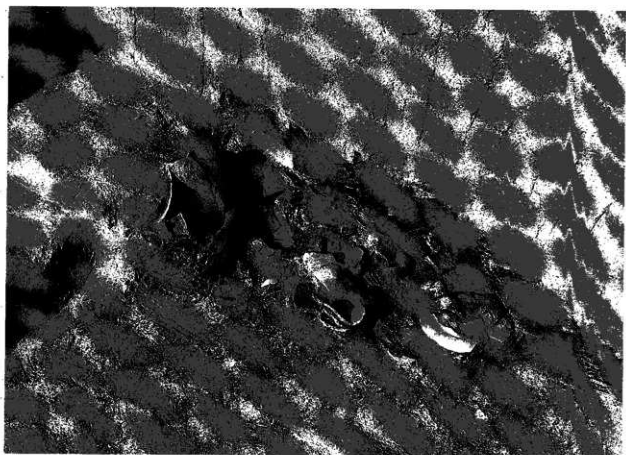
a. SX-103 白色粘土土层断面



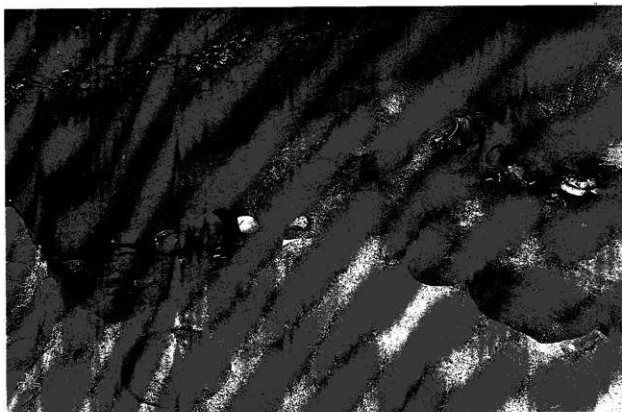
b. Pit91 铁砵出土状况



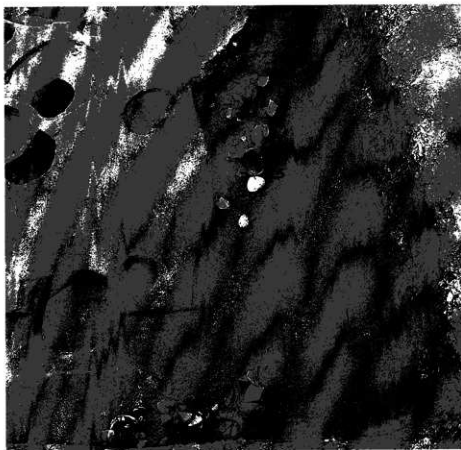
a. SX-101 土器発見状況（東から）



b. 同上 近景（東から）



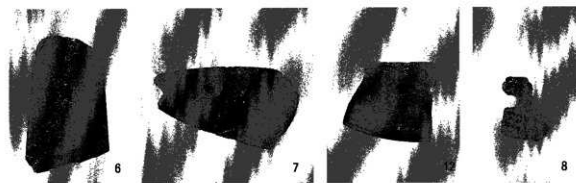
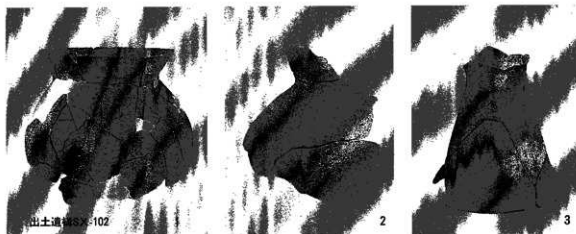
a. SX-101 土器検出状況（上から）



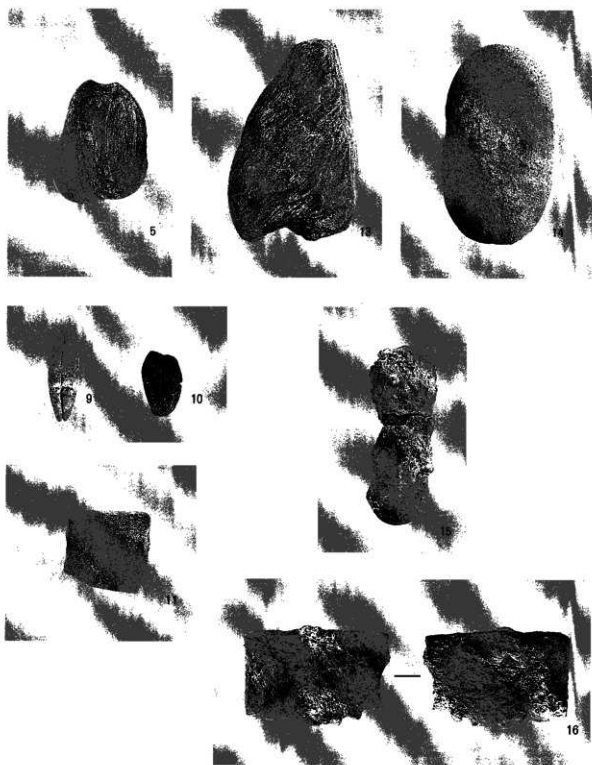
b. 同上-101 土器検出状況（東から）



弥生~古墳時代遺構完掘状況



出土遺物①



出土遺物②

報 告 書 抄 録

フリガナ	トマリカツラギイセキ							
書名	泊桂木遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第64集							
編集者名	岡部裕俊							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒 819-1192 福岡県前原市大字前原 6 2 3 番地 TEL 092-323-1111							
発行年月日	西暦1997年 3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
泊桂木遺跡	前原市大字泊桂木			33度 35分 10秒	130度 13分 10秒	1995.10.17) 12.18	100㎡	倉庫建設
フリガナ 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
泊桂木遺跡	集落	弥生中期	掘立柱建物 溝(状遺構) 土壇 柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、 瓦器、鉄斧、鉄鎌、石器、 鉄塞、				

泊桂木遺跡

福岡県前原市大字泊字桂木所在遺跡の調査報告書

前原市文化財調査報告書 第64集

発行 前原市教育委員会
〒819-1113 福岡県前原市大字前原623番地
Tel 092-323-4595

印刷 松古堂印刷株式会社
〒819-0373 福岡市西区周船寺1丁目7-64
Tel 092-806-1661

